

ADAM'S TRIAL vol.2

いよいよ、クライマックスの瞬間。 アダム・シルヴァーマンの挑戦はいかに？

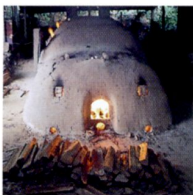
Photos & Text: Aya Muto

Adam Silverman

建築家、洋服ブランドX-LARGE®の共同創立者などを経て、2003年よりAtwater PotteryとしてLAで陶芸活動に専念。日本での注目度も高く、7月には東京のPlaymountain VILLAで個展が行われたばかり。今後は10月20日からTKG Editionsにて、2007年4月14日から益子のSTARNET ZONEでの個展が決定。www.atwaterpottery.com



7月17日、地面を刺し貫くような勢いで雨が直線に降り、しかし土や草地のまだ多い益子に、雨音は柔らかな背景音として立ちこめていた。濱田庄司の工房跡でもある参考館か



3室ある登り窯全景。前方3カ所の焚き口が開き、薪をくべる度に、左右の空気孔から耳のように炎が立ち上り、煙突からは黒い煙が。

らほど近く、益子に4代続く関沢窯の登り窯の周りは朝早くから賑わっていた。今日はいよいよアダム・シルヴァーマンの器を入れた窯の口が開かれる。安定性の謳われるガス窯が主流となった今、薪窯の窯出しはひととき、祭りのクライマックス的興奮の気配を漂わせていた。

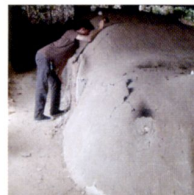
今年5月、まだ新緑の頃、アダムはロサンゼルス製の工房を離れ益子を訪れた。友人を介して知り合った関沢窯の工房で、益子ならではの土

(益子水簸土)と釉薬での作陶のためである。普段はカリフォルニア産の土を2種使用するも、かなりの精錬土であるとともに、焼くのも完璧にコントロールの利く電気窯。独特の釉薬使いで知られるアトウォーター・ポタリーごとアダムの作品は、同じ手とまったく違う環境、素材で作られるといかなる結果を出すのか。「陶芸はギャンブル」とその不確定要素を可能性にすり替え、アダムは9日間で器85点を廻し上げた。宿から工房へ毎日歩き、道すがら挨拶の手を挙げたり、会釈したりするアダムに、一昔前に益子を訪れていたバーナード・リーチの姿を連想した。

約束の8時半に、丸3日間自然冷



本焼き2日目、つかの間の休息。もはや焚き口周りには熱くていられない。窯焚きをもとにした「工房がわん」の関口ご夫妻とアダム。



風の前の静けさ。窯出し直前、アダム、最後の確認。3日間自然冷却された窯だが、空気孔を開けるとふわっと熱気がしめ出してくる。

却された窯の口は開けられた。一瞬の沈黙。アダムがかがみ込み、まだ熱気の残る窯内の器を初めて外光で確認する。「ワオ……」と感嘆の声が漏れたが早いか、器が次々と手際良く運び出される。「あの器は？それは？」という高揚感が運び手を急かすのか、勾配のある工房までの通路をなぜかみな小走りで行き来する。見ている方はハラハラ、ドキドキ。徐々に並びそろうアダムの器はくぐもった光沢を独特の造形にのせ、実に美しい。観客からも新しい器が運び出されるたび、溜息が漏れる。大成功の窯であった。灰がかかって緑のアクセントを付けた器もあれば、特別たっぷりかかった釉薬が絶妙に



2日で357束もの赤松を燃しきった。薪を束ねていた針金は、焚きの最中にさりげなく脇に重ねられていき、こうして集計される。

溶けて、4本の足のような造形美を作り出しているものも。春からの緊張が解けたアダムに顔には、ようやく安堵の笑みが浮かんだ。

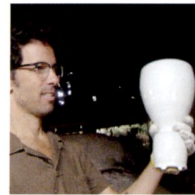
「ピン、ピン、ピン……」サーッと一雨音に、並べられた器が透き通った音を響かせる。耳を澄ませて聞き惚れる音。外気に釉薬が触れ、急激に収縮するときに生まれる「貫入」の音だそう。装飾の技法として用いられる貫入に、このような美しい音が伴うという至福。その日一日、器たちは鳴り止まなかった。

今回の窯焚きで燃された赤松は、実に357束(小割り薪が18束)。2日前には山と積み上げてあった薪がこつ然と消え、窯周りがすっきりし、



期待と不安が交錯するアダムの第一手。まずは手前の第一室より窯が開けられる。灰や還元剤の強度など、一番変化が楽しめる部屋。

見晴らしが良くなっていた。しっかりと益子の土の感触を手に刷り込み、釉薬の表情を目に焼きつけたアダム。「また絶対に戻ってこなきゃ」と、すでに次の『ギャンブル』を確信しているようだった。



「こうなると、もはや魔法だね」と、嬉しそうに釉薬の表情を語るアダム。陶板ぎりぎりまで奇跡の造形をみせた釉薬、黒白に感嘆。